

市民参加ガイドライン部会報告

メンバー

部会長 大島

委員 乾, 大西, 鈴木, 新妻, 西野, 野中, 安本

■第1回（平成20年10月28日）

議題

「市民参加ガイドライン」の改訂について
(今日は気楽に「参加」を語り合おう！)

主な意見

- 調査によると「市民参加」に対する市民の評価が低い。
- 市民には、市政に文句は言うけど、自分は参加しないと言う人がいる。
- 地域課題に関わる担い手の論議が必要。企業参加の動きも。
- なぜ市民参加の取組をするのか、必要か、というプロセスが欠けている。ガイドラインは、これを読む職員が考えるようなものに。
- 今回のガイドラインは、①市政への参加、②地域や市民の活動、のどこに重点を置くべきなのか。
- 今のガイドラインは①中心だが、②までガイドラインに入れるべき。
- 行政と、市民や地域との連携の「マニュアル」が欲しい。
- 「さくらトイレ」の取組がなぜ昔話でしかないのか？
- 地域に住んでいても市政協力員の動きは見えてこない。
- 岩倉北学区では既存組織を解体して、新しい組織を作り始めている。(学校運営協議会)
- 西宮市には、エココミュニティ会議といって、公募による市職員が地域活動に参加する仕組みがある。
- 区の基本計画の推進体制について知りたい。
- 市職員の話(悩み)を聞いて話がしたい。…参加、参加と言われても…

今後の進め方

- 市民参加の現状を理解する。
- 現場の人の話を聞いていこう。

■第2回（平成20年11月25日）

議題

(1) 現状の理解 ～現在、どのような取組が進められているか

基本計画の推進体制（下京区，左京区）

学校運営協議会（岩倉北小学校）

伏見ルネッサンスプラン

西宮市のエココミュニティ会議

(2) 「市民参加」に対する職員の意識・認識

主な意見

- 各区の基本計画推進組織の一覧が欲しい。そして、その推進組織がどのような形で動いているのか、それが区民とどのようにつながっているのか、地域のえらいさんだけでない地域の声をどのように汲み上げる仕組みになっているのか、知りたい。また、各区役所はどのような努力をしているのか。オープン性，流動性の努力をどのようにしているのか，体制がどのように地域にオーソライズされているかがチェックポイントになる。
- 地域の声の吸い上げ方として，自治連を通じるもの，公聴会のようなもの，課題ごとに参加希望者を募るものの3つにパターン化できると思うが，どのようなときにどのパターンが良いかという整理をして紹介してはどうか？
- 下京は地域の役員中心だが，定期的に人の交代はあるのか。右京では，基本計画推進組織に公募もあり，福祉関係者，商業関係者，女性会なども構成員である。
- 東山では，ふれあい事業をいきいきネットワークにビルトインしており，また，未来塾との関係を含めてプレゼンするだけのしっかりした資料がある。他の区でもあるのではないか。
- 行政区ごとの区別計画の検証の資料を集められないか。すべてをヒアリングすることは無理としても，よさそうなところ，問題のありそうなところをピックアップして，より深く区民の意見を取り入れる方法等を検証したい。
- 右京や左京で庁舎の建替に当たって WS を行っているのだから，それを参考事例として取り上げても良いのではないか。
- 同じ岩倉でも，岩倉南小学校は学校運営協議会を立ち上げていない。その教務主任に聞いてみたところ，これまで地域の各種団体がやってくれて何も困っていないので，あえて手を挙げていないとのことである。学校運営協議会に対して否定的な地域の声も聞いている。
- 学校運営協議会は，あくまで校長の権限の範囲で動けるだけ。従来からある評議委員会の方が地域が自由に活動できたと感じている。
- 子どもを介して父兄をつないでいくことは大事である。高倉小学校のフォーラム 21 は小学校の統廃合の後，唯一帰属意識を持つ組織となっている。

- 西宮市では、公募による担当部署以外の市職員が本務で地域活動に入る仕組みを作っている。ごみの収集量を学生が測って、地元貼り出すなど、地域が独自に取り組んでおり、市民のモチベーションも高い。
- 京都市でもちびっこ広場の整備や「夢・ロマン・京都シティ」などの市民参加推進プロジェクトで、市職員の庁内公募を行って、地域と一緒に地域活動に取り組んだことがある。東山では、「夢・ロマン・京都シティ」を使ってしばらく事業を継続しており、うまくいった事例である。京都市における市職員を公募して活動させた事例を調べておいてもらいたい。
- 横大路ルネッサンスプランは、クリーンセンターや魚アラ工場の建替問題を契機に、建替だけでなく、産業、暮らし、生業など総合的な視点で考えようという取組で、区長の強いリーダーシップで行政の各部局を横串にして進められた。

今後の進め方

- 市民参加に対する市職員の実態の調査について議論したいので、アイデアを持ち寄ってもらいたい。

■第3回（平成20年12月15日）

議題

（1）現状の理解

- 各区基本計画推進体制や委員構成
- 庁舎建替えのワークショップ（右京、伏見、左京）
- 深草の大岩山ワークショップ（「里山」再生大作戦）
- 市民参加推進プロジェクト活動報告書
- 学校運営協議会（洛央小学校）
- 京都市における庁内公募の実績 等

（2）「市民参加」に対する職員の意識・認識

- 調査項目などの議論

主な意見

- アジェンダ21のように政策論議に市民を巻き込んだことが含まれていない。そこも視野に入れるべきではないかとも思う。
- タイプごとに市民参加の取組は異なるだろうし、タイプ分けが必要であろう。
- 市職員に市民参加ガイドラインが役立っているのかなどを聞いてみたい。
- 東山の建替えで区民に不満が出た反省から、右京以降は建替えについて市民とワークショップを行った。伏見では広がりを持った取組になった。場所柄もあるのか。
- 職員には、市民の意見を聞かなければならないという意識は浸透していると思う。

しかし、近くの公園の改修でのワークショップには地域の役員くらいしか来なかった。普通の市民にあまり経験のないことなので、人が来なかったのだと思う。もっこのような取組を市民に PR をしたら良いと思った。

- でも PR してもなかなか市民が来ないというのが現実。決して市民が悪いというのではなく、自分のことと思うチャンネルがないのだと思う。隣に清掃工場が建つとなれば自分のことと思って動くが、公園ができる、庁舎ができるというのでは自分の問題は思わない。市民が自分のことと思えるようなストーリーを作れていないということ。
- 事例を取り上げて、このようなときにはこのような手法で取り組んではどうかというようなことをガイドラインに取り上げたらどうか。
- 東山の空家対策は、区民の側から声が上ったのではなく、地域課題の解決に向けて区役所が仕掛けて地域を動かしたもの。仕掛けが上手な事例。でも、身近な重大な課題でありながら、それに対する講演会などをやっても、人が集まらなかったという現実もある。
- 音楽活動を上手く地域に入り込んでやっていこうとするに当たって、東山に未来塾があるのを知って、申し込んだ。しかし、自ら申し込んだのは自分だけであって、他の方は区の働きかけなどにより申し込まれた方だったと後から聞かされた。今は未来塾から独り立ちした取組にも参加している。
- 東山は何か仕掛けるときに戦略を持って関わってきたことが他と違うところ。庁舎を建替えるからワークショップをするという形式的なものとは違う。東山の 10 年間のケーススタディをすれば、職員の市民参加への取組み方が見えてくるのではないか。
- 戦略の立て方、仕掛け方をガイドラインに載せるために、仕掛け人にどういう戦略を持って仕掛けたのかをヒアリングして、それを反映したらどうか。
- 市民が来ないのが悪いのではなく、仕掛けがなければ市民は来ないもの。
- 市職員は何を規範に動いているか。戦略をもってやっていく必要がある。財政が厳しい中では必然的にそうならざるを得ないのではないか。
- パブコメやワークショップなどどの手法をどの段階で取り入れたか、どういう戦略を持ってそうしたのか、ということを検証することも大事ではないか。
- 東山の歴代の職員に聞く取組をしたい。(東山追跡プロジェクト)
- 京都市の市民参加創成期の職員を集めて、あのとき燃えていたのはなぜかを語ってもらおう。市民参加支援プロジェクトのころの人に報告会をしてもらおう。そして、そのとき何を考えて、何を得て、振り返って足りなかったものは何なのか、などを語ってもらおう。コアのメンバーを何人かピックアップして呼びかけよう。
- 梅津の取組を題材にしてテーマを設定し、地域コミュニティ活性化に関する懇話会の委員も入れて、また、創成期に活躍した市職員を入れて、2月～3月に市民参

加円卓会議ができないか。

今後の進め方

- 次回は現ガイドラインの現状を検証して、改善すべき点をピックアップしたいので、考えておいて欲しい。

■第4回（平成21年1月26日）

議題

- (1) 現「市民参加ガイドライン」の検証
ガイドラインについて各自が意見を持ち寄って議論
- (2) 市民参加円卓会議の検討
今年度は市民参加フロンティアの職員を集めて議論をする。

主な意見

- 現「市民参加ガイドライン」の検証
 - ・ 「なぜ市民参加が必要か」（2P）に「時代の潮流」と記載されているのはいかなものか。また、7Pには情報の「公開」とされているが、「共有」であるべき。
 - ・ ガイドラインの記述は、市政参加と市民活動という市民参加の2本柱のうち、市政参加がほとんど。志縁活動への対応についても加えるべき。条例では、協働に努めることが市民の責務になっているのだから。NPOの状況も、ガイドラインができた平成15年当時とは随分変わっている。
 - ・ ①ガイドラインを職員がどの程度役立てているのか未だに分からない。なっていないならなぜか、②参加には、例えば区のまちづくりの取組から駐輪場の設置まで幅が広いが、このガイドラインでどの程度書き分けられるか、③市の財政というような大きな話への参加のあり方も考えないとならないのではないかと、④参加の結果をどのようにして返しているのか、⑤NPOや地元団体のように随分性格の違う団体の参加をどう書き分けるのか、⑥行政からではなく、市民の側からの提案制度というのは考えられないのか。
 - ・ ①市民参加をなぜするか。自分たちのために得になるという視点でもよいのではないかと、②これまでは市がすることについての参加の話でしかなかったが、地域やNPOが何かしたいときに市がどうサポートしていくかという話が含まれていない。③市民の意見を聞くといっても、地域の誰と組むのかについてどこでも議論されていない。
 - ・ ①最初に15年度以降の検証を入れられないのか、②事例や感想を入れてはどうか、③ゼストのように、NPOに参加を求め、市も参画し、協働の取組になった事例があり、NPO側が横串になっての参加もあるので、多様化していることも述べ

たいし、その事例は載せて読む人が考えられるものにした。

- ①民間がやっている取組に行政がどう関わるかという視点を入れると、今の多様な地域課題に対して市職員がどう関われば良いかの示唆が得るのではないかと。
- ②理念が多いので、事例があった方が良い。自分が関わっている京都市の会議で、ユースサービス協会において青少年活動に対するサポートに対する協働の事例を研究しているし、他にも事例を拾う作業をしているので、それを集めてくるのも良いのではないかと、③理念だけでなく事例研究をして職員研修を充実して欲しいと思う、④行政だけが担える時代ではなく、企業も含めた協働の事例を入れたほうが良い。
- 地域での歴々の意見を聞いて地域の声を聞いたことになっており、学区民に広く情報が行き渡らないことにもどかしく感じることもある。風穴を開けることを市職員にお願いしたい。
- ワークショップは関係を複雑化するものと手引書に書かれているが、現実には多く集まれば収まるという哲学が支えている。ワークショップは収めようと思って実施しているのではないかと。
- 京滋バイパスのような大きな話についても入り口だけでなく、出口までどうするのかを書くべきであろうか。
 - 手法だけでなく、なぜ市民参加が必要なのかというまで議論をしてきているのだから、そこまで書きたい。フロンティアの精神が伝播していないので、手法だけを書くのではなく、考え方で言及が必要である。
- 改訂の方針のまとめ
 - ① なぜ参加が必要なのか（多様化する背景を含めて）の哲学
 - ② 情報は公開でなく共有というものも含めた参加の幅を捉えて書く。
 - ③ 一方的な参加ではなく、双方からの協働を前提とした参加も盛り込む。
 - ④ 事例を盛り込むと分かりやすい。（リアルな現場からの気づき）
 - ⑤ フォローの仕組みまで盛り込むかは難しいかもしれないが、出口にいたるまでのフォローの仕組みを一定言及したい。
- ①職員へのヒアリングができていないので、フロンティアの人たちにとって市民参加が必要と気づいたときのことをリアルに書いたら、他の職員にも理解ができるのではないかと、②損得には、市側でも市民の参加抜きに行政運営ができない、市側にも得することであるということを書くべきと思った、③市民活動の章立てが必要であると思うし、事例紹介をしたら良いと思う。（地域活動応援ガイド、まちセンでの事例などを活用して）、④参加した結果が見えないとやろうと思えない。得だということが見えるように、プロセス設計、プログラム設計の項目に盛り込むべきと思う、⑤6Pの15のチェックポイントは市政参加のものなので、市民活動のチェックポイントが必要、⑥「すべてを実現することは容易でない」と書か

れているが、実現できたのはどうやってできたのかを示す事例が出せたら良いと思う。⑦市民活動は4として別立てが必要だと思う、⑧京滋バイパスのようにどう入れたら難しいようなものは、巻末資料に載せたらよいのではないか。

- ・ ①行政だけが担う時代でないことは書くべき、(時代の潮流と書くべきでない)、②早々と収めようとしなない、いろいろな思いを持っている人の意見は聞こう、③参加とは意見聴取ではなく、対話、協働である、④参加は得だからするのだということ、については書こう。
- ・ 事例集に陥りやすい失敗集を書きしていきたいと思う。市民が置いてきぼりにされた例を集めたい。→でも、失敗事例は集めにくい(失敗と気づいていないケースが多い。)ノウハウは職員に身に付けてもらわなければならない。
- ・ 京都市の既存の事例をまとめたものを、市民参加というキーワードで横軸を通すことで、市民参加の事例集になると思う。
- ・ 構成について一定の議論がされたので、今日まで出た議論を見て部会長で整理をしてもらえれば、今年度の残りの期間で構成の組立てができるのではないか。

○市民参加円卓会議

- ・ 市民参加の取組の形骸化、職員に主体的な意識が薄れているなどの課題があるなか、市民参加円卓会議を、市民参加のプロジェクトチームなどで活動してきた職員(市民参加のフロンティア)に呼びかけて開催する。
- ・ 市民参加推進フォーラム委員だけでなく、地域コミュニティ活性化に関する懇話会の委員にも声をかけたい。
- ・ 市の職員に自由に本音を語ってもらうためには、市民には非公開とする。ただし、その結果は公開する必要がある。
- ・ 開催日案を絞って28日のフォーラムに諮ることとする。

今後の進め方

- 構成の見直しを今年度中に完成させる。
- 市民参加円卓会議で市民参加フロンティアの職員に語りてもらい、これまでの市民参加の検証と評価を年度内にまとめる。
- どういう文章にするかは、年度をまたがって作業を行い、21年度の早い時期に新「ガイドライン」として完成させる。